

鏡視下 Bankart 修復術後の可動域推移について

○松本晋太郎 (PT), 古川 裕之 (PT), 福岡ゆかり (PT), 野田 優希 (PT), 藤田 健司 (MD)

藤田整形外科・スポーツクリニック

【はじめに】

反復性肩関節前方脱臼は前下関節上腕靭帯-関節唇複合体の損傷 (Bankart lesion) が主な病態とされ、観血的治療法が第一選択とされる。手術後、最終時における成績についての報告は散見されるが、経時的な可動域推移を記したものは我々が渉猟し得た限りでは見当らない。今回当院における鏡視下 Bankart 修復術後の可動域推移と最終時の機能を調査した。

【対象と方法】

2007年4月から2009年4月までに当院の関連病院にて鏡視下 Bankart 修復術を施行した57例中6か月以上経過観察できた44例44肩。術後3週・4週・5週・6週・8週・12週・最終時に肩関節可動域を測定した。また、スポーツ活動を行っている37例を対象に、Modified Row Scoreを用いて評価した。

【結 果】

屈曲可動域は三角巾固定除去後の3週から5週にかけて有意に増加し、その後徐々に改善していく。外転可動域は3週から6週にかけて有意に増加し、その後、徐々に改善していく。しかし外旋可動域は8週以降と遅れる傾向にあり、最終調査時において、術前可動域と比べ劣る傾向がみられた。Modified Row Score は excellent 21例・good 11例・fair 2例・poor 3例であった。